

# 悲劇『ハムレット』の唯一の喜劇性

## —イエス・キリストへの敬信とハムレットの迷い—

清水 英之

### 序文

この論の目的は、悲劇『ハムレット』でシェイクスピアが描きかかったのは新約聖書に描かれたイエス・キリストの試練のドラマなのであり、そして、イエスの愛の教を伝えているのではないかという仮説を証明してみることである。

エリザベス朝にプロテスタント側の努力によって『ジュネーヴ聖書』が出版されて、英国庶民は英語で聖書を読めるようになった。アーサー王伝説の時代からブリテン島と聖書の繋がり始まりエリザベス朝に至った。だから、シェイクスピアが聖書を熟知しているのは当然のことと筆者も思っていた。しかし、英語聖書が出版される以前は、民衆は神父を通しラテン語聖書の内容を説教で知るのが現実であったから、英国庶民が自分たちの言葉で聖書を直接読めるようになったことで聖書に対する新世界が開けたであろうという疑問には気付かなかった。もしかして、シェイクスピアも彼が愛読していたといわれる『ジュネーヴ聖書』から多大な影響を受け戯曲で伝えざるを得なかったほど感動したのではないかという疑問に取り憑かれたのは、筆者が大学を退職した後のことである。

退職後幸い学習院女子大学の非常勤講師となり、紀要第20号で「悲劇『リア王』の唯一の喜劇性について」議論できたのは、上記の疑問に対する一つの見解を述べる衝動に駆られたからである。そして、本論では、シェイクスピアが英語聖書から受けた感動を悲劇『ハムレット』のテキストに探ろうという衝動に駆られている。なぜ悲劇『ハムレット』は世界中で読まれ続けるのか、その本当の理由についてイエス・キリストの物語に照らして一見解を述べたいと思う。議論の進行は以下の通りである。

1. エリザベス朝の民衆と英語聖書
2. 『ハムレット』に感得できる聖書からの示唆
3. 悲劇を逃れた登場人物
4. オフィーリアの悲劇

## 5. 悲劇『ハムレット』の唯一の喜劇性

それでは、本論に議論を進めたい。

### 1. エリザベス朝の民衆と英語聖書

シェイクスピアの作品と英語聖書との関係性は多くの先行研究がある。しかし、この論では紙面に限りがあるので先行研究には触れず、一つの疑問を明確化することに留めたい。それは、一つにはエリザベス朝になって初めて英国庶民は英語で聖書を読めるようになったという事実の確認である。それゆえ、ラテン語の教養がない英国庶民は初めて直に聖書に触れ、彼らの魂を揺さぶられる感動を覚えたにちがいないという疑問である。

エリザベス朝のプロテスタント系の為政者たちは上流階級の人々に『ジュネーヴ聖書』を読むことを義務づけ、義務に反した場合には罰金を科したともいわれている。つまり、プロテスタント側の為政者たちが民衆に対するプロテスタント化の手段として『ジュネーヴ聖書』を使用したと十分考えられるのである。ラテン語聖書が権威あるローマ・カトリック側だとすれば英語聖書はエリザベス女王を最高権威とするプロテスタント側が使用する聖書であったと考えられるのである。

しかし、英国の教養ある人々はラテン語もギリシャ語もできた訳であるし、印刷術のお陰で英語も文字で読めるようになった。シェイクスピアが教養ある人々の範疇に入るかどうかは疑わしいが、少なくとも彼はグラマースクールでラテン語、ギリシャ語、英語を文字で学ぶことができる裕福な家庭に育った。それでは、学校で学べない民衆はどれだけいたのであろうか。いわゆる識字率が気になるところである。というのは、折角英語で読める聖書が出版されても英語が読めない民衆には依然として教会で説教を聞く方法しか聖書に触れる機会はないのである。シェイクスピアはこれらの英語が読めない人々にイエス・キリストの感動的な物語を劇場で伝えたかったのではないだろうか。それが筆者の疑問なのである。

### 2. 『ハムレット』に感得できる聖書からの示唆

『ハムレット』のテキストから伝わって来る聖書からの示唆を以下に指摘してみたい。

#### 2-1 イエス・キリストの誕生

『ハムレット』一幕一場は、亡霊が出現する身の毛もよだつ場面である。エリザベス朝の観客は無気味な雰囲気の中で地獄よりの使者の出現に怖いもの見たさを刺激された

であろう。しかし、そのテキストの中に思いがけず救世主の誕生が示唆されている。マーセラスの台詞を見てみよう。<sup>1</sup>

<i>Mar.</i> It faded on the crowing of the cock. Some say that ever'gainst that season comes Wherein our Saviour's birth is celebrated The bird of dawning singeth all night long, And then they say no spirit dare stir abroad, The nights are wholesome, then no planets strike, No fairy takes, nor witch hath power to charm, So hallow'd, and so gracious is that time. <i>Hor.</i> So have I heard and do in part believe it. (I. i. ll. 157-165.)	マーセラス. それは雄鶏が鳴いた時に消 えた。 我々の救世主の誕生を祝う 季節の到来に備えて 夜明けを告げる鳥は一晩中歌うという。 その時には、精霊はまったく外に出よ うとせず、 その頃の夜は健全で、惑星もまったく 影響せず、 災いする妖精も皆無で、魔女も呪文の 力を持たぬそうだ。 それほど神聖で、慈悲深い時期だそう だ。 ホレイショウ. 私もそう聞いている。ま あ信じてもいるがね。
--	---

ここで見逃せないのは、ホレイショウが「私もそう聞いている、まあ信じてもいる」という発言である。地獄の使者に対するイエスの力を観客にそれとなく示唆している。この台詞で観客はイエス・キリストの物語を思い浮かべてしまうだろう。

## 2-2 亡霊による殺人と姦淫の示唆

一幕五場ではとうとう父親と思われる亡霊とハムレットの対話が聞ける。この対話でエリザベス朝の観客はぞっとするような罪を示唆される。亡霊の台詞を見てみよう。

<i>Ghost.</i> Revenge his foul and most unnatural murder. <i>Ham.</i> Murder! (I. v. ll. 25-26.)	亡霊. 奴の汚れたこの上もなく不自然な 殺人に復讐してくれ。 ハムレット. 殺人だと！
---	---

<sup>1</sup> この論の『ハムレット』からの原文の引用は、全てCambridge University Press版による。議論に必要な箇所は版による違いに影響されないと判断した。日本語訳は全て筆者が訳を試みた。

ここで、「復讐」と「殺人」という言葉が観客の耳に飛び込んで来る。さらに、

*Ghost.* A serpent stung me, so the  
whole ear of Denmark  
Is by a forged process of my death  
Rankly abused: but know, thou noble  
youth,  
The serpent that did sting thy father'  
life  
Now wears his crown.  
*Ham.* O, my prophetic soul!  
My uncle?  
(ll. 36-41.)

亡霊。 蛇が私を刺したのだと、デンマーク中の耳が  
私の死の顛末の捏造で  
ひどく騙されている。が、気づけよ、  
気高き若者、  
汝の父の命を毒牙にかけたその蛇が  
今、奴の王冠を冠っている。  
ハムレット。 おお、我が魂の予言通り！  
我が叔父か。

「蛇」という言葉が観客の胸に突き刺さる。そして、最後に、

*Ghost.* Ay, that incestuous, that  
adulterate beast,  
With witchcraft of his wit, with  
traitorous gifts,  
O wicked wit and gifts, that have the  
power  
So to seduce; won to his shameful lust  
The will of my most seeming-virtuous  
queen;  
O Hamlet, what a falling-off was there!  
(ll. 42-47.)

亡霊。 そうだ、あの近親相姦の、あの姦通の獣が  
奴の知恵の魔力で、反逆の才能で、  
ああ、まさに誘惑の力ある邪悪な  
知恵と才能で、恥ずべき情欲にかられ  
最も貞淑に思えた我が王妃の意志を勝ち取ったのだ。  
おお、ハムレット、何という墮落があったものよ！

「姦通」と「近親相姦」という言葉が観客の恐怖感を煽ることになる。これらの言葉で観客たちは「創世記」のエデンの園の出来事を想起せざるを得ない。そして、「出エジプト記」のモーゼの十戒、及びモーゼがエホバから命じられたという他の律法も思い出さざるを得なくなる。モーゼは命じている、<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 聖書からの引用は、すべて『ジュネーヴ聖書』による。日本語訳については、この論の議論に問題がないので、日本語聖書を参照されたい。

13 Thou shalt not kil.  
14 Thou shalt not commit adulterie.  
15 Thou shalt not steale.  
16 Thou shalt not beare false witnes against thy neighbour.  
17 Thou shalt not covet thy neighbours house, nether shalt thou covet thy neighbours wife, nor his manservant, nor his maid, nor his oxe, nor his asse, nether any thing that is thy neighbours.  
(Exodus. XX.13-17.)

ハムレットの叔父は「殺人」「姦通」「盗み」「偽証」「先王の妻と王国に対する欲望」と十戒を悉く破った「蛇」つまり「悪魔の化身」だとハムレットのみならず観客も知ることになる。そして、この罪に対する罰は、

12 He that smiteth a man, and he dye, shal dye the death.  
(Exodus. XXI. 12.)

「死罪 (“dye the death”)」と定められている。ゆえに、「復讐せよ」と亡霊が命令してもハムレットも観客も迷う理由は全くないのである。こうして、亡霊とハムレットの対話の場面で観客は「原罪」と「十戒」に引きずり込まれることになる。

### 2-3 クローディアスはハムレットを誘惑する悪魔なのか

先王を殺しその妻を奪った国王クローディアスは平然とハムレットに説教をする。

<i>King.</i> 'Tis sweet and commendable in your nature, Hamlet, To give these mourning duties to your father, But you must know your father lost a father, That father lost, lost his, and the survivor bound In filial obligation for some term To do obsequious sorrow! But to persever In obstinate condolement is a course Of impious stubbornness, 'tis unmanly	王。ハムレット、其方の父に弔いの勤めを果たす 其方の心根は思いやりがあり誉むべきであるが、 其方の父も父を亡くしたことを知らねばならない、 その父も彼の父を亡くした、だから、 遺された者は ある期間、子としての勤めを担い 忠実な悲しみを表すものだ。だがな、 頑固に 哀悼の意を持ち続けるのは不敬で強情な 振る舞いなのだぞ、男らしくない悲し
---	--

grief,  
 It shows a will most incorrect to heaven,  
 A heart unfortified, a mind impatient,  
 An understanding simple and  
 unschooled.  
 For what we know must be and is as  
 common  
 As any the most vulgar thing to sense,  
 Why should we in our peevish oppositon  
 Take it to heart? fie, 'tis a fault to  
 heaven,  
 A fault against the dead, a fault to  
 nature,  
 To reason most absurd; whose common  
 theme  
 Is death of fathers, and who still hath  
 cried,  
 From the first corse till he that died to-  
 day,  
 'This must be so.'  
 (I. ii. ll. 87-106.)

みだ。  
 最も天に叛く気持を示しておる。  
 無防備な心、忍耐を知らぬ精神という  
 ものだ。  
 理解も単純で、学があるとはいえない。  
 我々に分かっていることは、最悪の事  
 でさえ  
 他と同様に当たり前の事と知ることで  
 なければならないし、そうであるのだ。  
 我々の神経をいらだたせる対立関係に  
 あって、  
 我々はなぜ当たり前のことを悲しむべ  
 きであろうか。いかん、それは天に対  
 する罪であり、  
 死者に対する罪だ。自然に逆らう行為だ。  
 理性に最も反している。父親たちの死  
 とは  
 理性にとって当たり前のことなのだから、  
 最初の遺体から今日死んだ者に至るまで  
 「これは仕方のない事だ」と叫んできた  
 のだ。

なんとクローディアスは最初にハムレットの行為を褒める。しかし、人の死は自然なことなのだと説得する。そして、頑固に父の死を悼むのは「男らしくない嘆き」であり、「最も天にもとる気持」だと、天を引き合いに出し巧みに説得する。そして、王子ハムレットが次の国王になると宣言する。

*King.* ... for let the world take note  
 You are the most immediate to our  
 throne,  
 (ll. 108-109.)

王. 世に知らしめよう、  
 汝は我らの王位継承者である。

この場面で観客は、この殺人鬼がただ者ではないことを感じるだろう。その説得力にただならぬ賢さを感じ、その賢さに「悪魔」を感じるのではないだろうか。そして、その悪魔は最後に正々堂々と「お前がこの国の支配者になれる」と示唆するのである。この「支

配者になれる」という誘惑により観客の意識は新約聖書の世界に誘引される。マタイ伝を見てみよう。

1 Then was Jesus led aside of the Spirit into the wilderness, to be tempted of the devil.

(S. Mattheue. III. 1.)

イエスは「聖霊」により導かれ悪魔の誘惑を受け救世主として相応しいかどうか試される。二つの誘惑を退け、最後にこう誘惑される（ルカ伝では二番目の誘惑）。

8 Againe, the devil toke him up unto an exceeding hie mountaine, and shewed him all the kingdomes of the worlde, and the gloryie of them,

9 And said to him, All these things wil I give thee, if thou wilt fall downe, and worship me.

(S. Mattheue. III. 8-9.)

悪魔は自分に平伏し崇拝すれば、世の支配者になれるぞとイエスを誘惑する。それと同じ誘惑が殺人者により行われるのである。ハムレットは試されている。そして、ハムレットのみならず観客も大いなる悩みを抱えることになる。「復讐」か「悪魔に従い支配者になる」か、それが問題となる。世界の支配者になれるという誘惑は、もう一度繰り返される。四幕五場を見てみよう。クローディアスはレアティーズにこう言う、

*King.* Leartes, I must commune with  
your grief,  
Or you deny me right. Go but apart,  
Make choice of whom your wisest  
friends you will,  
And they shall hear and judge 'twixt  
you and me.  
If by direct or by collateral hand  
They find us touched, we will our  
kingdom give,  
Our crown, our life, and all that we call  
ours,  
To you in satisfaction; but if not,  
Be you content to lend your patience to

王. レアティーズ、其方の悲しみに共  
感しないとならぬ、  
さもなくば、其方は直ぐにも私を拒否  
する。しかし、ここは一先ず下がり、  
君の最も賢明な友人たちを選んでくれ  
ぬか、  
そして、私と君の言い分を彼らに聞か  
せ判断させよう。  
仮に直接もしくは間接にでも  
我々が関与していると彼らが知れば、  
我々の王国を与えよう、  
王冠も、命も、我々のものと呼んでい  
る全てを  
君の思う存分に与えよう。だが、そう

us,	でなければ、
And we shall jointly labour with your	君の忍耐を我々に与えて満足してくれ
soul	ぬか、
To give it due content.	そうすれば、我々は君に協力して然る
(IV. v. ll. 202-212.)	べき満足を
	得られるよう君の魂と行動しよう。

父を殺され目の前で狂った妹を見たレアーティーズを巧みに説得し、自分と王妃の罪が明白ならば「王国を、王冠を、命を、我々の物全てをやろう」とクローディアスは言う。そして、レアーティーズはハムレットと違い、悪魔の誘いに乗ってしまう。観客は立派な青年が悪魔の誘いに乗ってしまったことで、レアーティーズの愚かさと同様、イエスの勝利を逆に意識させられるのではないだろうか。そして、観客は、ハムレットにはイエスと同じ様に悪魔の誘惑に勝って欲しいと期待するのではないだろうか。

#### 2-4 悪魔の世界とイエスの世界の対立

クローディアスが観客に悪魔を感じさせるなら、ハムレットはイエスを感じさせる。だが、ハムレットがキリストになれるかどうかは最後まで分からない。しかし、登場人物たちがクローディアスの世界とハムレットの世界のどちらの側なのかは観客に明らかにされる。

クローディアス側の代表はポローニアスであり、彼は忠実なる悪魔の手先と分かる。ガートルードは弱き女の代表であるが悪魔の誘惑に負けた王妃である。ハムレット側のつमりのローゼンクランツとギルデンスターンはハムレットに試され、悪魔側であることが判明する。レアーティーズは悪魔の誘惑に乗りクローディアス側に付く。オフィーリアは否応なくクローディアス側にさせられる。その他、国王の家来たちは当然悪魔側に付いている。

一方、ハムレット側には、ホレイショウとマーセラスしか属していない。ハムレットは狂気を装い先の二人と観客以外には誰にも本当の自分を見せない。ハムレット側に属している登場人物たちにハムレットは一つの秘密を共有するよう要求し、彼らを特別な感情で呼ぶ。一幕五場を見てみよう。

<i>Ham.</i> … I pray you all	ハムレット、皆にお願いだ
If you have hitherto concealed this sight	これから先、この見た事を秘密にして
Let it be tenable in your silence still,	くれれば
And whatsoever else shall hap to-night,	君たちの沈黙にずっと抑えてもらえる
Give it an understanding but no tongue.	ならば、

I will requite your loves, so, fare you well:

Upon the platform 'twixt eleven and twelve,  
I'll visit you.

*All.* Our duty to your honour.

*Ham.* Your loves, as mine to you!

Farewell.

(I. ii. ll. 246-258.)

そして、今夜他に何が起ころうと理解を示し、

だが、絶対に他言をしないでくれれば、僕は君たちの愛に報いるだろう。では、ごきげんよう。

見張り台に11時から12時の間に

君たちと会おう。

皆. はっ、殿下に対する我々の務め！

ハムレット. 君たちの愛を願いたい、君たちにも私の愛を！ごきげんよう！

*Ham.* With all my love I do commend me to you,

And what so poor a man as Hamlet is  
May do, t' express his love and friending to you

God willing, shall not lack. Let us go in together,

And still your fingers on your lips I pray.

(I. v. ll. 183-188.)

ハムレット. 私の全ての愛をもって、君たちに僕を委ねよう。

ハムレットは御覧の通り惨めな男だが、君たちに僕の愛と友情を表すだろう、神が望む限り、損なうことはないだろう。さあ、共に中に入ろう。

それと、呉々も君たちの口に指を当てておいてくれ。

亡霊の語った「殺人」の話はハムレット側の秘密となり、この秘密を守ることが彼の世界に属する資格となる。そして、その資格を認められた者たちをハムレットは「愛」「友情」という言葉で歓迎する。この「愛」と「友情」との関係がヨハネ伝のイエスの言葉を観客に示唆することになろう。

12 This is my commandment, that ye love one another, as I have loved you.

17 These things commande I you, that ye love one another.

(S. Iohn. XV. 12&17.)

13 Greater love then this hathe no man when any man bestoweth his life for his friends.

14 Ye are my friends, if ye do whatsoever I commande you.

15 Henceforthe, call I you not servants: for the servant knoweth not what his master doeth: but I have called you friends: for all things that I have heard of my Father, have I made knowen unto you.

(S. Iohn. XV. 13-15.)

こうして、クローディアスの悪魔の世界とハムレットのイエスの世界の対立は明白となり観客をますますイエスの物語に引き込んでゆくことだろう。かくして、『ハムレット』という劇は、悪魔の世界とイエスの世界、つまり支配と自由との闘争の様を呈し、ハムレットは観客と共に支配欲という悪魔の誘惑を退けるか否か迷い続ける展開となるのである。

### 3. 悲劇を逃れた登場人物

これまでの分析で、『ハムレット』という劇がどうやら新約聖書の悪魔の誘惑を背景にハムレットの葛藤が演じられるという理解に至った。モーゼの律法に従うならいつ「復讐」を果たしても観客は納得しただろう。なぜなら観客はクローディアスの告白を聞くからだ。三幕三場を見てみよう。

<i>King.</i> O, my offence is rank, it smells to heaven, It hath the primal eldest curse upon't, A brother's murder! (III. iii. ll. 36-38.)	王. おお、悪臭を放つ我が罪よ、天にも臭う。 人類最古の罪も背負っている。 兄弟殺しだ。
--	--

My fault is past, but O, what form of prayer Can serve my turn? 'Forgive me my foul murder?' That cannot be since I am still possessed Of those effects for which I did the murder; My crown, mine own ambition, and my queen; May one be pardoned and retain th'	我が過ちは過去のものだ、だが、どんな祈りが 私の悪行を贖うことができよう。「我が汚れた殺人を許し給え」か。 無理に決まっている。未だに殺人の目的のものを所有しているではないか。 私の王冠、我が野望、我が后。 許しを得て、尚も罪を保持できるものか。
--	---

offence?

(ll. 51-56.)

しかし、ハムレットはこの殺人者を殺せない。その理由をこの場面でハムレットは述べる。だが、一幕五場で父親の亡霊は次の様にハムレットに命じていた。

<i>Ghost.</i> O, horrible! O, horrible! most horrible!	亡霊. おお、恐ろしい、恐ろしい、最も 恐ろしい。
If thou hast nature in thee bear it not, Let not the royal bed of Denmark be A couch for luxury and damnéd incest….	汝に人の性があるなら、堪えてはならぬ、 デンマーク王室の寢床を 華美で罰当たりな近親相姦の臥所にし てはならぬ。
But howsoever thou pursuest this act, Taint not thy mind, nor let thy soul contrive Against thy mother aught—leave her to heaven, And to those thorns that in her bosom lodge To prick and sting her. Fare thee well at once,	だが、どんなにこれを実行しようとし ても、 汝の精神を汚してはならぬ、また、汝 の魂をして 母にいかなる画策をさせてもならぬ、 彼女は天に任せよ。 そして、母の胸に宿る茨の刺に 彼女を責め苛ませよ。
(I. v. ll. 80-88.)	

「だが、汝の精神を汚してはならない」「汝の魂をして母にいかなる画策をさせてもならない、彼女は天に任せよ」と亡霊は命じている。これらの命令はイエスの言葉を示唆していないだろうか。ルカ伝を見よう。

37. Iudge not, and ye shal not be iudged: condemne not, and ye shal not be condemned: forgive, and ye shal be forgiven.

(S. Luke VI. 37.)

「裁くな」とマタイ伝でもイエスは言っている。「許しなさい」とルカ伝では言っている。さらに、マタイ伝でもルカ伝でもこう言っている。

43. Ye have heard that it hath bene said, Thou shalt love thy neighbour, and hate thine enemy.

44. But I say unto you, Love your enemies: blesse them that curse you: do good to them that hate you, and praye for them which hurt you, and persecute you,  
(S. Matthewe. V. 43-48.)

「敵を愛せよ」、ハムレットにとってこれほど辛い命令はないだろう。父を殺され、母を汚されても「裁くな」「敵を愛せよ」と言われたら復讐など出来る訳がない。ハムレットは自分の意志では復讐をしないし、結局、母を許すことになる。三幕四場を見てみよう。

*Queen.* Have you forgot me?

王妃. 私を忘れたの?

*Ham.* No, by the rood, not so,

ハムレット. いいえ、十字架にかけて忘れてはいません。

You are the queen, your husband's  
brother's wife,

あなたは王妃であり、あなたの夫の弟の妻です。

And would it were not so, you are my  
mother.

そして、こともあろうに、私の母です。

(III. iv. ll. 14-16.)

*Ham.* What devil was't

ハムレット. 何という悪魔だったのですか、

That thus hath cozened you at  
hoodman-blind?

このように目隠しの鬼ごっこであなたを騙したのは?

(ll. 76-77.)

*Queen.* O Hamlet, speak no more.

王妃. おお、ハムレット、もう言わないで。

Thou turn'st my eyes into my very soul,  
And there I see such black and grainéd  
spots

あなたは正に私の魂に目を向けさせ、私はそこに酷く黒いぶつぶつした汚れが見える、

As will not leave their tinct.

その色を拭えないでしょう。

(ll. 88-91.)

*Queen.* O, speak to me no more,

王妃. おお、もう私に話しかけないで、

These words like daggers enter in mine  
ears,

その言葉が短剣のように私の耳に入って来る、

No more, sweet Hamlet.

もうやめて、愛しいハムレット。

*Ham.* A murderer and a villain;

ハムレット. 人殺しの悪党ですよ。

(ll. 94-96.)

*Queen.* No more! 王妃. もうやめて!  
*Ham.* A king of shreds and patches— ハムレット. 継ぎ接ぎだらけの王ですよ  
(ll. 101-102.)

ハムレットは思いの丈を振り絞って母を責める。母は、三度、「もうやめて」と懇願する。そして、この情け容赦のない厳しい裁きの場面で再び亡霊が登場する。

*Ghost.* Do not forget! this visitation 亡霊. 忘れてはならぬ。こうして現われ  
Is but to whet thy almost blunted たのは  
purpose— ただ汝の鈍りかけた目的の錆を落とす  
But look, amazement on thy mother sits, ため。  
O step between her and her fighting だが、見よ、汝の母に動揺が居座って  
soul, おる。  
Conceit in weakest bodies strongest さあ、母と彼女の葛藤する魂の間に入るのだ、  
works, 女たちのか弱き体には最も辛い煩いだ  
Speak to her, Hamlet. と考えよ、  
*Ham.* How is it with you, lady? ハムレット、彼女に話しかけよ。  
(ll. 110-115.) ハムレット. 母上、だいじょうぶですか？

こうして、亡霊の言葉にハムレットは我に帰り母を裁かず天に任せることにする。姦淫を裁かず天に任せるという点ではマグダラのマリアの件を観客は思い出すかもしれない。こうして、ハムレットは自分の精神を汚さずに済み、ガートルードはハムレット側に付くことになる。ハムレットの母は悪魔の支配から逃れることができる。

こうして見ると、ハムレットが復讐できない理由と母を許す理由に観客はイエス・キリストの言葉を思わざるを得ないであろう。

#### 4. オフィーリアの悲劇

悲劇『ハムレット』の悲劇を観客が感じるという観点から見ると、観客はオフィーリアの顛末にこそ悲しみを感じるのではないだろうか。オフィーリアはハムレットの世界に属する女性だと分かっているながら、クローディアスの世界を離れることができない宿命を観客は知っているからである。それでもオフィーリアはハムレットの世界に属する自分を主張して兄にこう言って抵抗する。一幕三場を見てみよう。

<p><i>Oph.</i> I shall the effect of this good lesson keep As watchman to my heart. But good my brother Do not, as some ungracious pastors do, Show me the steep and thorny way to heaven, Whiles like a puffed and reckless libertine Himself the primrose path of dalliance treads, And reckes not his own rede. (I. iii. ll. 45-51.)</p>	<p>オフィーリア. この良き教えを私の心の 番人として 私は守り続けるでしょう。でも、お兄様、 さる良からぬ牧師様たちがなさるよう に 天国への険しい茨の道を私に示してお いて、 ご自分はお太りの向こう見ずな放蕩者 のように お遊びの歡樂の道を歩まれませんかよう に、 ご自分の忠告に従わないようなことが ございませんように。</p>
---	--

そして父にもこう言って、抵抗する。

<p><i>Oph.</i> My lord, he hath importuned me with love In honourable fashion. <i>Pol.</i> Ay, fashion you may call it, go to, go to. <i>Oph.</i> And hath given countenance to his speech, my lord, With almost all the holy vows of heaven. (I. iii. ll. 110-114.)</p>	<p>オフィーリア. お父様、あのお方は愛を 以て熱心に 求婚して下さいました。 ポローニウス. そうだな、求婚とお前は 言うだろうな、やれやれ。 オフィーリア. それに、お言葉にあらん 限りの神聖な天の誓いを添えて下さい ました。</p>
--	--

しかし、オフィーリアにはこれが限界であることを観客は知っている。一方、イエスは「平和ではなく剣を」と言っている。マタイ伝を見てみよう。

34 Thinke not that I am come to send peace into the earth: I came not to send peace, but the sworde.  
35 For I am come to set a man at variance against his father, and the daughter against her mother, & the daughter in law against her mother in law.  
36 And a mans enemies *shalbe* they of his owne householde.  
37 He that loveth father or mother more then me is not worthie of me. And he that loveth sonne, or daughter more then me, is not worthie of me.

38 And he that taketh not his crosse, & followeth after me, is not worthie of me.  
39 He that wil save his life, shal lose it, and he that loseth his life for my sake, shal save it.  
(S. Matthewe. X. 34-39.)

親子の関係を断絶するためにこの世に来たとイエスは言う。イエスの世界に属したいならば家族の絆を切らなければならない。つまり、クローディアス側に属してはいけないのである。イエスを受け入れる者にしか愛は許されないという厳しさが二人の愛を破壊する。観客もハムレットもその厳しさを理解している。だから、苦肉の策でハムレットは有名な言葉を愛するオフィーリアに吐く、

Get thee to a nunnery,  
(III. i. l. 121)

しかし、愛し合うハムレットとオフィーリアは、モンタギュー家とキャレット家に属する宿命ゆえに死を迎えたロミオとジュリエットのように、悲しい別れを迎える。オフィーリアが狂いこの世を去り、ハムレットが五幕一場でこう告白する時、

<i>Ham.</i> I loved Ophelia, forty thousand brothers Could not with all their quantity of love Make up my sum...What wilt thou do for her? (V. i. ll. 263-265.)	ハムレット. 私はオフィーリアを愛して いた。4万人もの兄弟たちが 彼らの全ての愛を合わせたところで 私の愛にはかなわないだろう。君は彼 女に何がしたいのだ。
--	---

観客は劇場でその悲しみを感じるであろう。この観客を感じる悲しみこそが悲劇『ハムレット』の現実的悲劇なのである。

## 5. 悲劇『ハムレット』の唯一の喜劇性

悲劇『ハムレット』には様々な悲劇を感じることはだろう。罪を後悔しても悪魔役を演じるしかないクローディアスに悲しみを感じることもできるだろう。悪魔の手先となって愚かにも死んでゆくポローニアスに哀れを感じることもできるだろう。しかし、もちろん、最高の悲劇の主人公はハムレットでなければ意味がない。ハムレットの悲劇はモーゼの律法とイエスの愛の間で、つまり裁きと許しの相反する行為の間で揺れ動き、どうしようもなく悩むことしかできない人間の悲劇なのではないだろうか。だが、ハムレ

トの悪魔との闘いはどうなったのであろうか。誘惑に負けたのか否か、その疑問に答えを出す必要がある。

### 5-1 亡霊に対する懐疑

ハムレットは父親と思われる亡霊に「真実」を語られ「復讐」の念を抱く。さらに、母親の不貞に対する「怒り」も加わり、亡霊の言葉を信じてもやむを得ないと観客は思うだろう。実際、レアティーズは父と妹の復讐心からクローディアスの奸計に嵌まってしまふ。しかし、ハムレットは亡霊の言葉を疑う冷静さを持っている。一幕四場を見てみよう。

*Ham.* Angels and ministers of grace  
defend us!  
Be thou a spirit of health, or goblin  
damn'd,  
Bring with thee airs from heaven, or  
blasts from hell,  
Be thy intents wicked, or charitable,  
Thou com'st in such a questionable  
shape,  
That I will speak to thee.  
(I. iv. ll. 39-45.)

ハムレット. 天使たちよ、聖人たちよ、  
我々を守りたまえ！  
汝が健全なる霊であろうと呪われた邪  
鬼であろうと、  
天空の風をもたらそうと地獄の熱風を  
もたらそうと、  
汝の意図が邪悪であろうと慈悲深かろ  
うと、  
汝がそのような疑わしき姿で現われた  
のだから  
私は汝に口を開くぞ。

ハムレットには、天の使者か地獄の使者か判断しようとする余地が残っている。二幕二場を見てみよう。

The spirit that I have seen  
May be the devil: and the devil hath  
power  
To assume a pleasing shape; yea, and  
perhaps  
Out of my weakness and my melancholy,  
As he is very potent with such spirits,  
Abuses me to damn me: I'll have  
grounds  
More relative than this: the play's the

ハムレット. 私が見た例の亡霊は  
悪魔かもしれない。悪魔は人が喜びそ  
うな姿に  
化ける力があるからな。そうだ、おそ  
らく、  
私の弱みと憂鬱に付け込んで、  
まさに悪魔は亡霊たちを支配する力が  
あるから、  
私に毒づき地獄に落そうとするのだ。  
こんなものより



*Ham.* How is it with you, lady?

(ll. 149-150.)

*Ham.* Confess yourself to heaven,  
Repent what's past, avoid what is to  
come,

(ll. 152-156.)

ハムレット. 天に告白をして下さい。  
過去を悔い改め、これからの罪を避け  
て下さい。

亡霊に促されハムレットは母を裁くのを思い止まる。そして、「天に告白をして下さい」「過去を悔い改めてください」「これからの罪を避けてください」とハムレットが言うのである。この言葉を耳にし、マグダラのマリアに言ったイエスの言葉を思い出さない観客は居なかったであろう（もちろん聖書を英語でも読めない観客もいたであろうが）。イエスも人がどんな罪を犯そうか裁くのは人ではなく天のだと新約聖書で示唆している。ゆえに、ハムレットが五幕二場で、

*Ham.* There's a divinity that shapes our  
ends,

Rough-hew them how we will-

*Hor.* That is most certain.

(V. ii. 10-11.)

ハムレット. 人生を終わらせる神意なる  
ものがある。

どのように終わるか我々は漠然と思う  
ものだ。

ホレイショウ. 確かに、そうでございます。

*Ham.* Not a whit, we defy augury.

There is special providence in the fall of  
a sparrow. If it be now, 'tis not to come-

if it be not to come, it will be now-

if it be not now, yet it will come-the

readiness is all. Since no man, of aught  
he leaves, knows what is't to leave

betimes, let be.

(V. ii. 217-222.)

ハムレット. 我々は予兆なるものを全く  
無視したりはしない。雀一羽落ちるのも  
特別な摂理があるのだ。死が今であれば、  
もう来ることはない。これから来ない  
のであれば、それは今なのだろう。今  
でないなら、これから来るのだ。覚悟  
が肝心だ。人間はどの道死ぬ。折り良  
く死ぬなどということは誰にも分から  
ん、なるに任せよう。

と言う時、神に全てを任せることをハムレットが選択したことを観客は知る。ハムレットは自分の自由意志で神意に従うことを選んだのである。逆に言えば、自分の意志を放棄したのだ。なぜなら、自分の意志は自分の感情に左右され、結局は、神ではなく悪魔を選ぶことになるからだ。観客はこのハムレットの決意に心の中でイエスの言葉を聞かないだろうか。イエスは、悪魔の最後の誘惑（ルカ伝では二番目の誘惑）、つまり、悪

魔を拜めば全世界の支配者にしよう、という誘惑を退ける時に何と言ったか。マタイ伝を見てみよう。

10 Then said Jesus unto him, Avoide Satan: for it is written, Thou shalt worship the Lord thy God, and him onely shalt thou serve.

(S. Matthewe. IIII. 10.)

主なる神を崇拜し、神だけに従うと言い、イエスは悪魔の誘惑に勝ったのである。つまり、ハムレットも天に任せると覚悟を決めた時クローディアスに勝利したのだ。観客はその勝利にイエスを感じるのではないだろうか。

### 5-3 悲劇『ハムレット』の唯一の喜劇性

『ハムレット』が悲劇であることは誰もが承知している。しかし、悲劇『ハムレット』の真価は悲しみを誘う筋書きだけにあるのではないように筆者には思えてならない。寧ろハムレットがイエスの教えを実践したことに『ハムレット』の感動があるように思える。上記で考察したようにハムレットは悪魔の誘惑に勝利している。そして、死を迎えたハムレットにガートルードは言う。

*Ham.* How does the queen?

ハムレット. 王妃はどうですか？

*King.* She swoons to see them bleed.

王. 彼らが血を流すのを見れば卒倒するものだ。

*Queen.* No, no, the drink, the drink—  
my dear Hamlet—

王妃. 違う、違います。その杯、ああ、ハムレット、

The drink, the drink! I am poisoned!

その杯、杯！私は毒を盛られました。

(V. ii. ll. 306-308.)

母は最後にハムレットの世界を選択したのである。母と息子は最後に「愛し合う」ことができた。レアーティーズは言う。

*Lear.* —thy mother's poisoned—

レアーティーズ. あなたの母上は毒殺されました。

I can no more—the king, the king's to blame.

私はもうだめです。王が、王がその責めを負うべきです。

(ll. 317-318.)

*Lear.* Exchange forgiveness with me,  
noble Hamlet,

レアーティーズ. 互いに許し合いましょ  
う、ハムレット様。

Mine and my father's death come not  
upon thee,

私と私の父の死があなたの所為になら  
ないように、

Nor thine on me!  
(ll. 327-330.)

あなたの死が私の所為にならないよう  
に。

そしてハムレットは応える、

*Ham.* Heaven make thee free of it! I  
follow thee…  
(ll. 336-338.)

ハムレット. 天が君を罪から解放なさい  
ますように。私も君の後を追おう。

ハムレットとレアーティーズは「許し合う」ことができたのである。

こうして、最後にクロードィアスを殺し復讐を成就し、母との愛を取り戻し、レアーティーズと許し合えたハムレットの最後は悲しみの涙を誘うだろうが、ここには喜びも含まれていないだろうか。愛し合い、許し合えたことの喜びで観客は複雑な涙を流さざるを得ないのではないだろうか。ヨハネ伝でイエスは言っている、

10 If ye shal kepe my commandements, ye shal abide in my love, as I have kept my Fathers commandements, and abide in his love.

11 These things have I spoken unto you, that my ioye might remaine in you, and that your ioye might be ful.

(St. John. XV. 10-11.)

筆者は、ここにイエス・キリストの教えを貫いた王子ハムレットに観客が感じる喜びがあると思うのである。そこに悲劇『ハムレット』の真価があり、唯一の喜劇性が隠れていたのではないだろうか。

## 結論

この論の目的は、悲劇『ハムレット』でシェイクスピアが描きたかったのは新約聖書に描かれたイエス・キリストの苦悩のドラマなのであり、そして、イエスの愛の教えを伝えているのではないかという仮説を証明してみることであった。悲劇『ハムレット』が世界中で読まれ続ける本当の理由を、シェイクスピアが英語聖書から受けた感動を悲劇『ハムレット』のテキストに探ることにより理解しようと試みた。その結果、悲劇『ハムレット』はイエス・キリストの試練の物語とイエスの愛の教えを示唆していることを理解することができた。そしてハムレットがイエスの教えを貫いたところに悲劇『ハムレット』の真価があり、唯一の喜劇性が隠れているという見解を示唆することができた。こう解釈することで、日本の『ハムレット』上演に新しい演出が試みられることを期待したい。  
(本学非常勤講師)